

学習形態 新型コロナウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

第二部

『化身土巻』に学ぶ（3）

前回の補足で第 19 願成就文について、ちょっとのべましたが、今回もこの成就文について学んでいきたいと思います。

課題 3 7 標挙の文に〔至心発願の願 邪定聚の機 双樹林下往生〕とあるが、この 19 願の成就が機の成就と往生の成就との二つの成就を示しているに見える。これの意味するところは何か。

ここ(p 327)の第 19 願の成就文ですが、『大経』の「三輩の文」と『観経』の「九品の文」というふうに分けて言われています。ところが、このご自釈の次に、その三輩・九品の引用ではなく、無量寿仏の「道場樹」の文を引用し、そして「胎生・化生」の内容が引用されてきます。これは往生の成就でしょう。言うなれば、機の成就と往生の成就とひとつである、という事でしょうか。

このことを、どう理解するか。少々所感を述べておきたいと思います。

まず御自釈で、第 19 願の成就文は三輩・九品の文と述べられています。これは何を意味しているかと言えば、“邪定聚”という事を示していると考えられます。何故かと言えば、“機”というのは私たち人間を指しているわけですが、その人間を三種・あるいは九種類に分けているわけですが、三あるいは九種の集まり（定聚）をしめしているわけですが、しかしそういう風に人間を分けることは、正しくないのだ、というわけで「邪」といっていると思うのです。つまり言ってしまうと、人間を分類すること、あるいは分類されていることは「邪」である、ということを見つけていく事が第 19 願の成就であるという事ではないでしょうか。

因願に「十方衆生」とあります。にもかかわらず、その十方衆生を三輩・九品に分けられることが、本願の目的（成就）なのか、というと、そんなことはあるはずがありません。

衆生が菩提心を発して功德を修して浄土に生まれようとするとき、衆生にいろんな差がついてしまうわけです。そうしますと、上位の者は速やかに浄土に往き、下位の者は遅れて浄土に往くのか、というとそうではない。すべて臨終まで待つ、というのがこの願のねらいではないのかと思います。「臨終時に大衆と圍繞して現前する」と。この事

は重要なポイントだと思っています。つまり、菩提心を発す、至心発願することは大切ではあるが、それによって浄土往生の要因になるのではない、という事です。上輩も下輩も同時であるという事でしょう。しかも「臨終時」という同時性です。大衆と圍繞するということに同時なのです。

そういう自覚を目覚めさせるという意味において、そこは浄土であるというわけですね。浄土は浄土ですが、真の浄土でないから「化身土」というのでしょうか。

それじゃあ、“そこ”とはどこか、と言えば、「道場樹」という事になってくるわけです。

それでは次に「なぜ道場樹という樹なのか、そしてその樹がなぜ道場なのか」という事について考えていきたいと思えます。そういたしますと、その文面から考えるに、釈迦の成道が思い起こされます。(釈迦一代の教?)

即ち菩提樹の元で悟りを得るという内容のことです。そしてその法悦に浸っているわけです。そこに梵天があらわれて、その悟りを衆生に広めてくれるように頼むわけですね。ご存じの「梵天勸請」ですね。その時、二回断るわけです。それで三回願うので、釈迦は引き受けて、最初一緒に出家してきた五人に法を説くわけですね。簡単に簡略して述べましたが、釈迦は何故断ったか。それは「この法は難解で誰にもわかるはずはない」と思ったわけですね。そしてその後釈迦は「転法輪」していくわけです。

この事は、この願成就文に重ねてみれば、「疑惑心」ではないかと思うんですね。この娑婆の衆生を信じない、この娑婆の衆生の仏性を信ぜず、但法悦の宮殿に留まっている姿ではなかったのか、という風に重ねてみるができるわけです。また、その後の釈迦の教団において、それこそ優れた人とそうでない人達を分けてグループ化していく、釈迦滅後、部派に分かれていく歴史を見ても、そのことは頷かれるでありましょう。

思えば、「道場」という言葉は、私達現代の聞法会などにおける独善的傲慢さや閉鎖性などを見抜いた「胎生・化生」ではないのか、とも思われてくるのは私だけでしょうか。

親鸞当時、同朋同志の中で、私達と同じようなことがあったのではないのでしょうか。だから (p331)「自ら己が能を思量せよ」と戒められているのではないのでしょうか。

余談というか、補足であります。橘さんから頂きました、宗門の改革案やそれに対する意見等読ませていただきましたが、私達の「同朋会運動」とは何なのか、そして「同朋社会」とは何なのか、『宗憲』では「同朋社会の顕現」と言われているが、今回の文章に「同朋社会の実現」と言われているところを、長田さんが指摘しておりますが、これはまさしく私たちが今学んでいる「化身土」の問題だと感じています。

「同朋社会」は実現などしません。「同朋社会」は実現するのではなく「顕現」してくるのです。顕現という事は、何かによって「あらわれてくる」という事でしょう。我々が作り出すのではないんです。我々の前に現れてくるんです。

「化身土」の世界で「真仏土」を実現しようとしても不可能です。この現実が「化身土」であると気付いた時、「真仏土」が現れてくるんです。それを親鸞聖人は、「難思議往生を遂げんと欲う」と言われます。だから、これは実現しているのではない。親鸞の前に顕現した、という事ではないでしょうか。真仏土が顕現するという事は、ぱあっと見えてくるわけではない。それは幻覚です。真仏土に往生したい（遂げんと思う）という形で真仏土が具体的な内容として見えてくる、ということに他ならないわけです。

それでは「同朋会運動」とはなにか。言うなれば、この現実を「化身土」として歩いていく事にほかなりません。という事は、真・化・偽を決判していくという事でしょう。もっと言えば、異執・邪偽を明らかにすることによって真が顕現してくるという事なんでしょう。ですから、そのためにはこの『化身土』を丁寧に、「同朋会運動」を念頭に入れながら学ぶ必要があると、私は思います。

課題38 韋提希が何故浄土を願ったのか、あるいは『観経』が何故浄土を説かなければならなかったのか。

『観経』はご存じの通り、三千年前のインドのマガタ国の出来事です。即ち“現実世界”の事です。ですからこれは、たとえ過去の事であっても、私たちの現実世界の出来事としてまず確認しておかなければなりません。そのうえで『観経』を読んでみましょう。

今回の『観経』を読むポイントとして、「韋提希がなぜ浄土を願ったのか」という事と「釈迦がなぜ九品を説いたのか」という二つをとりあげ、そしてこの二つがどのようにリンクしているのか、という事を考えてみたいと思います。

まず、韋提希が何故浄土を願ったのか、という問いは、誰でも認識しているように、提婆・阿闍世によって苦しめられ、この現実絶望していくわけです。そして、この「濁悪処」を離れたい、と。そしてそういう事のない「清浄業処」を見える方法を教えてください、と懇願するわけですね。（実は、そこの文章を丁寧に読まなければならないんですけど）その時、韋提希の心にどういう気持ちがあったのか、ですね。私は、韋提希の心には「このような濁悪処が未来にはなくなるのだろうか。未来に清浄業処があるのだろうか」という疑問を持っていたのではないかと思います。即ち、浄土への疑惑です。言ってしまうと、それは本願への疑惑、仏智疑惑でしょう。

（この疑惑心というのは、本来表には出てこないものです。いつも隠れている。だから厄介なんです。この疑惑心も課題にすべきでしょうけれども、私自身見通しが立たないでいます。）

その時に、釈迦は、眉間から光を放ちて、（中略しますが）諸仏の国土を見せるわけですね。それに対して韋提希は、「いや、私は阿弥陀の極楽世界に生まれたいと楽っているんです」というわけです。ここで釈迦は“微笑”するわけです。この“微笑”が重要なポイントなのです。この事を親鸞聖人も取り上げられていることは、御承知のとおり

りですね。

課題39 「釈迦微笑」(p 331) についての思案

この「釈迦微笑」を『観経』で見ると、韋提希が「他の仏国ではなく、阿弥陀の浄土を楽う」わけです。その時「釈迦微笑」して五色の光を口から出し、その光が頻婆娑羅王の頂を照らし、王は阿那含になった、と書かれています。

つまり「釈迦微笑」は、韋提希が阿弥陀の浄土を願ったことに「微笑」したと読めるのですが、これを親鸞聖人は「達多・闍世の悪逆に縁って、釈迦微笑の素懐を彰わす」と述べられています。これを「顕」と「彰」に分けて述べられていますが、『経典』とは異なる内容になっています。

この事を(顕と彰を用いてまで)何故異なる内容にまで掘り下げて了解する必要があるのでしょうか。そしてこのことが『総序』の文で「浄邦縁熟して、調達・闍世をして逆害を興ぜしむ」と述べ、発題していることを思えば、見逃せない課題ではなかろうか。

思うに、『観経』のままでも問題なく、すんなりいくわけですが、そうなると19願が成り立たなくなってしまう。というのは、善人と悪人との差が生まれてしまうからです。あるいは頻婆娑羅王の仙人殺害という悪と阿闍世の母を殺害せんとした罪の軽重の比較が存在してきます。そうしますと三輩・九品という事を肯定することになってくるわけです。

以前『総序』を読んだとき、どんな話をしたか覚えていませんけど、ここの「浄邦縁熟して、調達・闍世をして逆害を興ぜしむ」をどう読むか、「浄土の縁が熟したから、彼らに逆害を起こさせた」というふうに読めるわけです。浄土に生まれる縁が熟したという事は、逆悪の人をも救えるのであることを実証したといえるのではないのでしょうか。いや、裏返しにいうならば、逆悪を担う事が浄土の縁が熟したことなのだ、という領きなのではないのでしょうか。

したがって、「顕」と「彰」は誰の眼にも顕かな事と、自らの上に領きとして彰かになってくることの違いを説かれているのではないのでしょうか。親鸞は「釈迦微笑の素懐」と言われています。「素懐」とはもともと思っていること、素から憶っていること、という事ですから、「彰」を示していると言えるのではないのでしょうか。

親鸞が、「観経に顕彰隠密がある」というところから、『観経』を読み解いていかれるわけですね。この「王舎城の出来事」は私たちの現実世界です。という事は、親鸞聖人時代の念仏弾圧の出来事の中に、そしてこの21世紀という私たちの現実にも顕彰隠密があるという事を物語っているわけです。

この辺は皆さんと話し合う必要があると思います。とりあえず、p 331—13行目までの概論とさせていただきます。各論においてはもっと課題をひろうことができるでしょうけれども、その辺はみなさんから出していただければと思います。〈つづく〉

補充 『化身土』における「願名論」

どなたか「願名論」という論文を書かれていたような気がします、どなたか存じませんか。ここで気になりますのは、願名の転回する「マタ」です。漢字で書けば、「復」・「亦」ですね。ちょっと参考までに「マタ」の漢字の違いをここに書き出してみます。

又・・・一度済みし事を重ねて言う

復・・・重複の義、くりかえし言う、フタタビ

亦・・・一物あり之をうけてコレモマタ、旁及の辞（広く行き渡っていること）

こうしてみますと、ここの五つの願名がありますが、「マタ」で区別してみますと、前四つは「復」で並列に述べられ、最後の一つが四つを受けて、「亦」で「だからコレモマタ」というニュアンスになります。

この五番目の「至心発願の願」というのは「だからこれが浄土に生まれることを願っている願である」ということが内在されていることを示そうとされているのではないかと、思われます。逆に言えば、往生するための手立てです。同様に 20 願では「至心回向の願」がそれに当たります。これも往生するための手立ての願です。手立ての願という事は、この願が衆生側にある願だという事になります。

という事は、阿弥陀の本願が手立てをこうしていることになります。どうも妙な話になってまいります。ここをどう了解していくか。

ともかく、19・20 願はそれぞれ発願と回向を課題にしていることなは違いない。化身土としての発願回向を転換して「行巻」の発願回向に転回しているのではなかろうか。『行巻』(p177) に明らかにされています。これは善導の「玄義分」(p176) に「南無というはすなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり」と述べられていることを受けての事であるが、その帰命を「わが心」としていくのが化身土なのでしょう。

こうしてみると、「南無（帰命）」「阿弥陀仏（選択本願）」を明らかに確かめられていくのが『化身土巻』の役目であったんだろうと感じております。そのために願名を「至心発願」「至心回向」を選び取られたのではないのでしょうか。